

## 多様性あればこそ

先週の木曜日は昇天日でした。今からおよそ 2000 年前のイースターに復活したイエス様は 40 日にわたって弟子たちにそのお姿を現され、それから天へと昇って行かれたのです。そのことを記念して、今も教会ではイースターから 40 日目の木曜日を「昇天日」と定めています。今日はその直後の主日ということで、イエス様昇天の場面を聖書箇所に取り上げさせていただきました。これを読みながら、改めてイエス様昇天のその意味を考えると共に、私たちの宣教について考えるひと時を持ちたいと考えています。

さてそういう訳で、先程は聖書の中から使徒言行録1:3～11をお読みいただきました。3節を読みますと、そこには先程申し上げましたように、イエス様が復活された後、40日にわたってその姿を弟子たちに現されたことが記されています。けれども、40日目に、イエス様は弟子たちのもとを離れて天へと昇って行かれたのでした。6～11節には、その時の様子が詳しく記されています。

これを読みますと、私たちはまず、弟子たちが復活の主に出会っても、まだイエス様のことをきちんと理解していなかったことが分かるでしょう。弟子たちはイエス様に言います。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」。ここには、弟子たちがまだイエス様のことを、自分たちを支配するローマ帝国を打ち倒し、かつてのイスラエル王国をもう一度打ち建ててくれる、そうして自分たちをこの世的な繁栄に与らせてくれる、そんな政治的、軍事的指導者として、そのような華々しいヒーローのようなメシアとして捉えていたことが窺えます。

しかし、イエス様は決してそのようなメシアではありませんでした。イエス様はむしろ、すべての人々の罪を背負って十字架の上に死に、そこからの復活を通してすべての人々の罪の贖い、救いを成し遂げる苦難のメシアとして御自身を示されたのです。けれども、弟子たちの心は鈍く、このことがまだ分かっていませんでした。あいかわ

らず、イエス様のことを、先程申し上げたような華々しいヒーローのようなメシアとばかり理解して、6節のように尋ねたのです。

こうした弟子たちの思い込みに満ちた問いを、イエス様は特に全面的に否定するということはなさいませんでした。どのみち聖霊が降ってくれば、彼らは正しい理解に導かれると考えたからでしょうか。その代わりに、イエス様は、「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない」と弟子たちにお告げになります。そして、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と、弟子たちのこれからの使命について語るのです。

使徒言行録のこの後の箇所では、イエス様のこの御言葉通りに、弟子たちの上に聖霊が降って来ます。そして、弟子たちはイエス様のことについて、特にその十字架と復活について神様の真理を知らされます。そして、力に満たされてイエス・キリストの福音を証ししていくのです。

その意味で、弟子たちに聖霊が降ってきたペンテコステの出来事は、弟子たちにとってこれから宣教を開始していく、大きなターニングポイントであったとすることができます。奇しくも、教会の暦では来週ペンテコステの日を迎えますが、このペンテコステから始まっていく聖霊降臨節の期間、私たちは神様が聖霊を降してこの地上に教会を建てられたその意味と言いますか、教会の使命についてしっかりと思いを馳せ、宣教を初めとした教会の働きに邁進していかなければなりません。その時に心に留めておきたいのが、イエス様昇天の出来事、その意味なのです。

イエス様昇天の出来事は今日の聖書個所以外に、ルカによる福音書24:50～53にも記されています。ここでは、手を広げながら天へと昇って行くイエス様の姿が記されています。イエス様の弟子たちは天にあるキリストを見上げ続けます。イエス様がこ

の地上を離れて天へと昇って行かれた。それは、イエス・キリストがこの世界のすべての人々の救い主となられたということに他なりません。イエス様の弟子である私たちはこのイエス・キリストを仰ぎ、このイエス・キリストに従う集まりなのです。

イエス・キリストは私ひとりのイエス・キリストではなく、世界のイエス・キリストであられる。イエス・キリストはその広げられた御腕によって、この世界のすべての人々を受け入れ、抱きかかえ、祝福される。であるならば、このイエス・キリストを主と仰ぐ私たちは、この世界にあって様々な違いを持ったすべての人々を愛し、こうした人々と、大きな祝福のうちに共に生きていくように召されているのでしょ

う。そしてこのように違いを受け入れ合うということは、私たちの宣教においても大きな武器となるはずで

す。様々な違いを持った人々が携わってこそ、宣教においては豊かな実りが生まれる。それは真理ではないでしょうか。

このことに関連して、日本聖書神学校の学報で荒瀬牧彦先生が興味深いことを巻頭言に書いておられました。使徒言行録15:36～41には、パウロが二回目となる宣教旅行に出発する時のことが記されています。この時、パウロの良きパートナーであったバルナバが「マルコと呼ばれるヨハネも連れて行きたい」と願いました。しかし、パウロはこれに反対します。一回目の宣教旅行の時にパンフィリア州で自分たちから離れ、途中で帰ってしまったような者は連れて行くべきではないと言うのです。しかし、バルナバはパウロのこの意見に強く抗いました。結果「激しく意見が衝突」し、バルナバはマルコを連れてキプロス島に向かって船出し、パウロはシラスを伴って陸路シリア州やキリキア州に向かっていくことになったのです。一人の若者を巡る意見衝突から一が二に分裂したのです。

このマルコという人物はエルサレムの出身で、母が熱心な信徒でした。その家が「マリアの家」と呼ばれているので、おそらく父親はいなかったのでしょう。門のある立派な家の育ちで、コロサイの信徒への手紙には「バルナバのいとこ」とも書いてあ

ります。幼い日から家に出入りする信徒たちの姿を見ながら育ったのでしょう。彼をアンティオキアに連れて行ったのはバルナバとパウロです。次の世代を担う優秀な人物として目を付けられていたのです。ところがその彼が最初の宣教旅行で離脱してしまっただ。その理由は聖書には記されていませんが、彼には旅がハードすぎたのか、あるいは単にわがままだったのか、それとも何か秘めた事情があったのでしょうか。

荒瀬先生は学報の巻頭言の中で、このように信用を失墜させる行為が過去にあり、おそらくまだその課題を抱えているであろう伝道者候補生を巡って、二人の指導者がまったく異なる態度を取ったことに注目しておられました。パウロはここから先の宣教の困難を予見していて、行く先の人々の信頼を損なう可能性のある人物を不適格と判断した。厳しい態度を示すことこそマルコのために必要と思ったのかもしれない。他方バルナバは同行の機会をもう一度与えることによって一人前に育てられると確信したのだろう。基準に厳しくあることで信仰者を訓練し、教会を守ろうとする立場と、それとは違う見方をもって人に接する立場。どちらの判断も筋が通っています。それゆえパウロは妥協しないし、バルナバも強い覚悟でマルコを擁護する。その結果宣教のチームが二分裂したというのは悲劇のようですが、しかし方針や持ち味の異なる二つのチームが誕生し、それが宣教全体の豊かさをもたらしたとも捉えられるのではないかと荒瀬先生は言うのです。

「伝道者養成課程に関わる神学校や教会においてパウロ的な確固たる態度はとても重要です。そこにおいて安易な妥協を続けているとご都合主義に陥ります。でも、異なるアプローチを取るバルナバ的な存在も非常に重要なのです。人は多面的です。人に託されている福音宣教も多面的です。人は変化します。宣教も変化していきます。唯一の価値観によるある一時点での判断を絶対化することはキリストの道ではありません。宣教の出発点としてのアンティオキア教会はパウロとバルナバの両方を擁し、両チームを宣教に送り出したということを心に留めておきたいと思います。使徒言行録はこの後パウロの宣教に集中していくので、バルナバの宣教についてはわからないのですが、しかしマルコの名前は書簡に登場し、彼が離脱者に終わらなかったことを

私たちは知ります。『私の協力者』としてのマルコ(フィレモン1:24)、また『私の務めのために役に立つ』から『連れて来てください』と請われるマルコ(テモテ二4:11)。パウロとバルナバの両方いる教会が、彼を育てたのです。」

昇天日を迎え、ペンテコステを来週に控えた今日、私はこの荒瀬先生の言葉をしっかりと噛み締めたいと思います。人を育てることも、人に福音を宣べ伝えていくことも、社会の課題を担っていくことも宣教です。価値観や考え方も含めて、私たちに多様性があればこそそうした多面的な働きを豊かに為していくことができるのです。教会の総会や役員会、様々な委員会などでは、やがては一つの意見に集約されていくのかもしれませんが、それでも私はこのことを忘れずに、そこにおられる一人ひとりを大切にし、その過程で出た一つひとつの多様な意見をも大切にしていきたいと思えます。

教会においては様々な違いを受け入れ合い、多様性を喜び合うことがとても大切。多様性あればこそ私たちは豊かに神様の御用を果たしていくことができる。このことを忘れずに、来週から始まる聖霊降臨節のシーズン、しっかりとこの府中の地から神様の愛と福音とを普く宣べ伝えて参りましょう。

お祈りをいたします。 ——以下、祈祷——